

・研究ノート・

19世紀インドにおける 新聞と通信技術

—電信を事例に—

ボネア・アメリア

1 はじめに

1-1 背景

植民地期インドにおける新聞に関する研究は数多く行われてきたが、新聞と通信技術のかかわりに焦点をあてた研究は僅かしかない。しかし、19世紀に実用化した蒸気船や電信などの新技術は新聞の発達過程において大きな意味をもっていた。特に電信は、他の技術と違い、電気を利用することで、情報を短時間のうちに遠方に伝送することを可能にしたため、時間・距離・空間を越えられる技術として注目を浴びた。通信・交通手段の発達によって、インド亜大陸内だけでなく、イギリスとインドの間の情報交換は迅速化され、行政・軍事・貿易のほか、新聞報道にも変化がみられるようになった。本稿は、インドへの陸上ルートと電信ルートの開設と普及を明らかにした上で、19世紀インドに発行された英語新聞をいくつか取り上げ、インド新聞史における技術の意味と役割を考える。

執筆者紹介

Bonea, Amelia ●オクスフォード大学ウェルカム医学史研究所ポストドクター研究員 南アジア近現代史、メディア史、科学技術史、医学史

・ Bonea, Amelia, 2010, "The Medium and Its Message: Reporting the Austro-Prussian War in the *Times of India*", *Historical Social Research*, Vol. 35, No. 1, pp. 167-187.

・ Bonea, Amelia, 2013, "Discourses of Labour, Religion and Race in the *Australasian Methodist Missionary Review*: The 'Indian Coolie Mission' in Fiji", in Felicity Jensz and Hanna Acke (eds.), *Missions and Media: The Politics of Missionary Periodicals in the Long Nineteenth Century*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, pp. 169-186.

1-2 先行研究の現状と課題

本節では、先行研究の動向を整理し、本稿の理論的枠組みについて論じる。19世紀を対象にした南アジア研究においては、電信と新聞の歴史を個々に考察した研究は数多くあるが、通信技術の発達とジャーナリズムの関係に焦点を当てた研究はほとんど見当たらない¹。それゆえ、包括的研究はなされていないのだが、電信と新聞の関係についての短い記述は様々な先行論文で散見できる。例えば、インド電信史を考察したシュリーダラーニー (K. Shridharani) やゴーマン (M. Gorman) は、電信がインド社会に与えた「インパクト」の一つに新聞報道の劇的変化があると述べている [Shridharani 1953: 61, Gorman 1971: 597]。しかし、両者は新聞紙そのものの分析を行っておらず、新たな技術の受容と使用を取り巻く社会的情勢を軽視しているとともに、電信と新聞の関係を新聞革命・技術革命という単純化した枠組みの中に位置づけている。だが、技術の単なる存在は、必ずしも革命的な社会変化を引き起こすとは限らない。特に、「スピード」という電信の特質のみに焦点が当てられると、技術の理想的な振る舞いと、その実際の活用との区別がつきにくいことがある。これに対して、本稿は電信ネットワークの確立と発展をめぐる事情を明らかにした上で、当時のニュースに反映された技術の利用を考慮し、新聞と電信の関係をより包括的に理解しようとしている。本稿では、ニュース報道における電信の役割からみれば、19世紀は革命的時期というより、むしろ過渡期であったと主張したい。

電信が19世紀に新聞革命を引き起こしたという言説は南アジアに限らず、西欧を対象にした既存研究においても盛んに用いられている。例えば、電信がアメリカの新聞界にもたらした変化には次のようなものがあると思われる：事実に基づいた報道の誕生（客観報道）、ニュースの速報性 (timeliness) の誕生、新聞ニュースが地域性や個人性を失ったこと、ニュース報道が発生順型から非発生順型へと変わること、など [Kielbowicz 1987: 33-36, Carey 2009: 162-163, Bell 2007: 79, Rantanen 2009: 15]。これらの見解は、技術の社会的位置づけを主張した研究者によって批判された。シュッドソン (M. Schudson) はアメリカ・ジャーナリズムにおける客観性の歴史を探究し、電信による影響より、むしろ商業や政治活動が生み出したニーズを主張すべきであると述べた。彼が指摘するように、「近代報道の誕生は政治の民主化、市場経済の拡張や

都市中間層の権威の強化によるものであり」、最新ニュースを求めたアメリカの商人層が鉄道や電信など、情報を迅速に伝送できるような技術を開発したという [Schudson 1978: 4]。そのほか、ブロンハイム (M. Blondheim) もアメリカ社会における空間や時間の感覚の変化は電信の開発以前から始まっていたと指摘しており、その変化の原因は電信の使用より、交通手段の発展であったと述べる [Blondheim 1994: 12]。さらに、ブロンハイムは電信の二面性を指摘し、この新技術の使用に伴う通信のスピード化はアメリカの電信史の一面にすぎないと断言した。つまり、電信による情報コミュニティ形成という言葉の裏側には、通信不全や通信危機という、軽視できない現実が存在し、電信はアメリカ全国を統合させたと同時に、地域間の格差や不平等をも生み出したのである [Blondheim 1994: 12; Blondheim 2003: 155]。

本稿では、以上のような点を踏まえて、ニュース報道と電信の使用を多角的な観点から考察したい。もちろん、失敗した通信と成功した通信の事例を共に考察の視野に入れるということは電信の重要性を否定することではない。特に、イギリス植民地統治における電信の役割は無視できない。一種のグローバルな通信ネットワークの基盤となった電信はイギリスの国力をどのように支えたのか、また世界中におけるイギリス帝国主義の拡大とどのような関連性を持ったのかという問題は先行研究において、一つの大きな課題として浮かび上がった。ここでやはり、1980年代に公開されたヘッドリク (D. Headrick) の研究が影響力を持つ。ヘッドリクはそれまで軽視されていた蒸気船、キニーネ、元込め銃、電信、鉄道など、幅広い意味での技術の開発を検討し、イギリス帝国の拡大と発展との関連性を探った。彼によると、それらの技術は「帝国の道具」にほかならないものであった [Headrick 1981]。

しかし、電信をイギリス帝国の「道具」としてのみ解釈すると、この技術の複雑性が失われる可能性がある。例えば、電信の軍事的役割を示すエピソードと言え、1857年に起きたインド大反乱が最も有名であろう。この反乱を鎮圧した技術として注目を集めた電信は、長期にわたってイギリスによるインド支配の強力なシンボルとなった。パンジャブ州の副知事を勤めたロバート・モントゴメリーの「電信がインドを救った」(The Electric Telegraph has saved India) という言葉が行政官、政治家、ジャーナリスト、作家など、様々な分野で活躍した人々に受け入

られるようになり、幅広い言説を生み出した²。しかし、このような言説は必ずしも事実をもとにしたものではない。ラヒリ・チョードリー (D. K. Lahiri-Choudhury) が指摘するように、1857年の電信網は不完全であり、構造的・形式的欠陥のために、電信を活かす能力に欠けていた。なかでも目立ったのはケーブルの不完全な絶縁性、二重通信方式の欠如や電信ルートの不適切な位置であった [Lahiri-Choudhury 2010: 31-49]³。

そのほか、軍事的・行政的動機を優先させたヘッドリクと対照的に、ウィンゼックとパイク (D. Winseck and R. M. Pike) は電信の発展を取り巻く商業的動機も考察の視野に入れ、電信ネットワークの世界的拡張を可能にした多国籍電信会社の役割を主張した [Winseck and Pike 2007]⁴。彼らの研究は国民国家の国境を越え、資本や専門知識の流通に基づいて形成されたグローバルな電信ネットワークの歴史を再現する試みである。後述するように、南アジアにおける電信ネットワークの形成過程においても、インドの主要都市カルカッタ、ボンベイ、マドラスを基盤に活躍したイギリス人とインド人商人の影響力が高く、軍事的動機と商業的動機は共存した。このことは新聞が報道した電信ニュースにも反映されるようになった。

以上の研究成果から、電信と新聞の相互関係について、次の3点が明らかになる。電信は社会から孤立するのではなく、様々な社会活動と密接な関係を持っていた。つまり、電信は社会に影響を与えると共に、社会に影響され、新聞界における電信の役割は、社会的・経済的・政治的背景をぬきにしては理解できない。さらに、電信という新たな技術は新聞の発達過程において重要な役割を果たしたにもかかわらず、19世紀ジャーナリズムにおける変化は電信の使用のみによるものではなかった。アメリカ・ジャーナリズムの事例が示すように、新聞界の変貌は多数の要因に依存した。最後に、技術の存在と技術の使用は必ずしも重なるとは限らない。電信の活用を最も正確に証明できるのは新聞紙そのものであるわけだから、新聞を参照せずに報道の変貌を辿ることは困難である。本稿は以上の3点を踏まえて、19世紀インドという特殊な社会背景の中で新聞と技術の相互関係について考察を行う。

2 帆船や蒸気船による情報通信

次にインドとイギリスを結んだ帆船と蒸気船ルートについて述べる。

電信が発明される以前、インドとイギリスの間のコミュニケーションは長いあいだ船舶によって行われた。18世紀末に東インド会社が運営した喜望峰回りの帆船は4ヶ月もかけてロンドンとカルカッタの間で郵便物を運搬していた。新聞や情報の交換に必要な時間はかなり長かったことが分かる。しかし、蒸気船の出現は世界各地における交通の姿を一変させ、19世紀の観察者もしばしば指摘するように、各地域間の距離を短縮していく。蒸気機関を推進力とした蒸気船は19世紀半ばから「海洋の高速道路」とも呼ばれた航路を通じて五大陸を結び、人々・物・情報のグローバルな流通を下支えした [Tyler 1867: 288, Dempsey and Hughes 1871]。後の電信ネットワークは既存の交通ネットワークと平行して開発・利用されるわけだから、19世紀のイギリス帝国における情報通信の発展は、電信が発明される以前から利用されていた蒸気船のような交通手段をぬきにしては理解できない。

蒸気船の開発は国際交通に大きな影響を与えた。イギリスでは、19世紀初頭頃から喜望峰ルートの代替を探索する試みが相次いだ [後藤 1984: 152-161]。1820年代末から、ワグホーン (T. F. Waghorn) という陸上ルートの開拓者はエジプトを経由した郵便線路の確立に挑み始めた。実際、ワグホーンも蒸気船のほか、馬車、駱駝、ボート、ロバなど、ありとあらゆる交通手段を用いて、マルセイユ、マルタ、アレキサンドリア、スエズを経て、イギリスからインドへ郵便物を運んだ [Sidebottom 1948: 16-20; *Asiatic Journal and Monthly Miscellany* September 1830: 14]。例えば、彼は1836年にイギリスで収集した手紙や新聞をおよそ63日かけてボンベイに送達することに成功した。新聞の郵送料は一紙に当たり6ペンスで、郵送時の注意点は次の通りであった。

1. 新聞の両端が見えるようにすること。
2. 新聞の掛け紙以外に表記を認めないこと。
3. 運送は1週間以内に発行された新聞に限ること [Sidebottom 1948: 65, *Gazetteer of Bombay* 1909: 377]。

1840年代に入ると、ワグホーンの郵便運搬事業は次々と新しくできた蒸気船会社によって競争を強いられるようになった。なかでも有名なの

はイギリスのPeninsular and Oriental Steam Navigation Company（以下、P&O社と略称する）であった。P&O社はインド進出を目指し、郵便運送契約をめぐる東インド会社と競争を繰り広げた。1843年にP&O社はセイロン南部のゴール（Galle）とインド南部のマドラスを經由するカルカッタ・スエズの間の定期郵便線路を開通した。さらに、約10年後の1855年には、イギリス本国政府からの援助を受け、それ以前に東インド会社が運営していたボンベイ・スエズ間の線路も獲得した〔Harcourt 2006〕。このように、19世紀半ば頃までにP&O社はイギリスとインドの間の郵便運送契約を獲得することに成功し、インド・イギリス間の直通運航を独占することで、イギリス帝国における新聞や情報交換において重要な役割を果たすようになったのである⁵。

当初の郵便運送契約に基づいて、当時政治の中心であったカルカッタが優先的な扱いを受けたが、1866年にP&O社の郵便運送契約が更新され、ボンベイがカルカッタに代わって、本国との郵便交通の中心港となった〔Parliamentary Papers 1866: vol. IX: iv〕。この展開の背景には、ボンベイの商人層による圧力のほか、インド亜大陸内における鉄道網の拡張があった。特に、ボンベイ・カルカッタ間やボンベイ・マドラス間の鉄道建設の完成は郵便物の運搬方法を一変させ、以前では10日間もかけてボンベイからカルカッタへと運搬されていたイギリス本国の郵便は鉄道線を利用することによって、ボンベイからインド各地域へとすばやく輸送されるようになった〔Headrick 2006: 4〕。こうしてボンベイは郵便交通上、「インドのもっとも重要な港」となったのである〔Harcourt 2006: 105, *Gazetteer of Bombay* 1909: 377-378〕。

P&O社の蒸気船は地中海とスエズ運河を通過し、イギリスのサウサンプトンとボンベイを結び、月に1回、後に2回の回数で運行を行った。帆船時代に比べると、19世紀半ばにおけるイギリスとインドの間の郵便運送所要日数は約1ヶ月まで減少し、新聞に掲載されたニュースの速報性（timeliness）という観点から考えると、非常に重要な進展であった。さらに、P&O社の運航路はペナン、シンガポール、香港、上海、横浜まで拡張し、ヨーロッパとアジア間のほか、海域アジアにおける人々・物・情報の流通を支えた⁶。

3 電信による情報通信

3-1 インド亜大陸内の電信網

本節では、植民地期インドにおいて電信ルートはどのように形成されたのかを概観する。ただし、本稿で扱う電信は電気電信に限り、早くも18世紀末からインド亜大陸内の様々な地域で使用された腕木通信(semaphore)は考察の対象にしないことをあらかじめ断っておきたい⁷。

植民地期インドに電信をもたらした人物といえ、一般的にはウィリアム・ブルック・オショーンネシー(William Brooke O'Shaughnessy)というアイランド出身の医者・科学者の名前が有名であるが、インドへの電信の導入と普及を提唱したのは彼が初めてではなかった。1839年6月に開催されたベンガル・アジア協会の会議にて、アドルフ・バザン(Adolphe Bazin)は自ら開発した電信装置を公開し、インド内の情報交換を改善するため電信の導入を提案したのである[Lahiri-Choudhury 2000: 338]。しかし、当時の科学成果は1本の導電体による基地局間の通信の可能性を十分に証明したにもかかわらず、バザンが開発した電信機は30本ものの導電体を必要としていたため、実行不可能と判断された[*Journal of the Asiatic Society of Bengal* 1839: 715-716]。

他方、オショーンネシーは植民地政府の支援を求めながら、自らの電信実験を進めていた。ラヒリ・チョードリーによると、オショーンネシーはカルカッタの研究所で製作した電信機を様々な公式の場で公開・実演し、当時頻繁にみられるエンターテインメント科学者(entertaining scientist)の1人であった[Lahiri-Choudhury 2010: 16]。彼は、1851年に実験用の電信線の建設を完成し、インド初の陸上電線でカルカッタとダイヤモンド港(Diamond Harbour)を結ぶことに成功した。この電線の長さは僅か82マイルに過ぎなかったが、商人や新聞読者の多くが求めていた経済情報—主に船舶の入出港、両替相場や市場動向などに関する情報—を迅速に伝送し、カルカッタの商人層に大きな利益をもたらした[Cotton and Meyer 1908: 437, Ghose 1995: 155]。

電信の実用分野は貿易商に限らず、イギリス植民地の行政と軍事戦略のうえでも大きな役割を担った⁸。電信の可能性を早期から認識していたインド総督ダルフージとイギリス東インド会社の取締役会が電線路

の拡張計画書を認可した結果、僅か5年間で約3,000マイルの陸上電線が敷設され、インドの主要都市であるカルカッタ、アーグラ、ボンベイ、パシヤール、マドラスなどは電信ネットワークに組み込まれることになった。この電線路は1855年2月1日に開業し、植民地行政官や商人のみならず、一般の庶民による利用も認められた [Shridharani 1953: 27-28]。インドにおける電信網は急速に拡張し、1900年の時点では、インド電信局 (Indian Telegraph Department) は約60,000マイルの電線と2,000の電信局所を管理していた (表1)。

表1 インド国内電信網の拡張、1855-1905

年度	電線の長さ (単位：マイル)	局所数	有料電報数 (外国電報・内国電報 を含む)	有料電報料収入 (単位：ルピー)
1854-55	3,255	48	—	64,810
1864-65	13,258	174	—	906,376
1874-75	16,155	216	837,391	19,16,878
1884-85	25,387	521	2,018,097	34,98,027
1894-95	44,648	1,362	4,391,226	64,41,872
1904-05	61,684	2,189	9,098,345	88,10,608

IOR/V/24/4288, 1910, *Administration Report of the Indian Telegraph Department for 1909-1910*, Simla. より著者作成

電線の拡張に伴って、電報通の数も次第に増加したが、特に1870年代から著しい進展をみせた。表1を参照すれば分かるように、1870年代半ばの有料電報料収入は10年前に比べて3倍以上に向上した。この増加は官報と私報、国内電報と海外電報など、あらゆる電報の種類とサービスにみられる。この展開の背景には、1870年代半ばに起きた南インド飢饉とそれに伴う情報通信活動の活発化があった [IOR/V/24/4286 *Administration Report of the Indian Telegraph Department for 1877-78*: 645]。さらに、この時期における通信料の低減も電報の数に大きな影響を与えた。というのは、1873年度の電報料は電信が開業した20年前の料金の半分まで下がっていたのである。1855年にカルカッタとボンベイ間の電報料は24語数当たり8ルピーであったのに対して、1873年にその料金は4ルピーまで下がっていた [IOR/V/24/4284 *Administration Report of the Indian Telegraph Department for 1872-73*: 19]。

ここで改めて注意しておきたいのは、インド亜大陸内の通信事業は官

業であったにもかかわらず、単なる行政通信網ではなかったということである⁹。確かに、電信技術はインドの現状を把握するため重要な役割を果たし、イギリス帝国の軍事や行政を下支えしたという意味では、ヘッドリクが指摘したように、一種の帝国の「道具」であったにちがいない。しかし、電信の導入は軍事や行政利用目的に限らず、貿易利用目的にも非常に重要であった。植民地官僚や商人を巻き込んだ、電信線の敷設位置、通信料や電報の発信順番などをめぐる様々な議論もこの技術の広範的な活用を証明している¹⁰。そして、電信を通じて交わされた政治情報・経済情報の一部は新聞紙に掲載されることによって、より多くの読者に流布し、彼らの世界観を彫琢した。

3-2 イギリスとインドを結ぶ電信ネットワーク

一方、19世紀半ば頃からロンドンとインドを電信線で結び付けようとする試みも相次いだ。その結果、すでに1865年までに二つの地上電線ルートが敷設された。一つはサンクトペテルブルグとテヘランを経由し、ロンドンとカラチを繋いだ(いわゆるロシア線)。もう一つはコンスタンティノーブルとバグダッドを経て、イギリスとインドを結んだ(いわゆるトルコ線) [Simpson 1928: 384-385, Winseck and Pike 2007: 33]。しかし、これらの線路はイギリス帝国の支配が及んでいない地域を通過していたため、通信の安全上で問題があると思われたほか、メッセージの翻訳と再翻訳に伴う解読ミスが原因で配信された情報の正確性が疑われることもあった。この問題を乗り越えるためには、イギリスとインドを直通的な海底電線で結びつけることが望ましいとされたが、当時の海底ケーブルの絶縁は不完全であり、海底電線による通信は困難であった。海底通信の姿を変えたのがガッターパーチャと呼ばれる絶縁材料であった。ガッターパーチャは天然ゴム性の根管充填材で、スマトラ、ボルネオ、オランダ領ジャワやイギリス領マラヤなど、東南アジア中心の地域で成長する木の樹液から産生された [Tully 2009, 土屋 1998: 4]。1847年にドイツの電気工学者ヴェルナー・フォン・ジーメンスがガッターパーチャを海底ケーブルの絶縁に活かしたことは電信の歴史にとって大きな転機となった [Beauchamp 2001: 137-138]¹¹。

1870年までにイギリスとインドは二つの新たなルートによって結び付けられた。一つはインド・ヨーロッパ線 (Indo-European Line) と呼

ばれ、イギリス本国政府の支援を受けたジームズ社によって敷設された。このルートは1870年1月31日に開業した。ロンドンからテヘランまでの区間はインド・ヨーロッパ電信会社 (Indo-European Telegraph Company) の管理のもとに置かれ、現在イラン南西部にあるブーシェフルという都市を経由し、テヘランとカラーチーを結んだ。残りの区間はインド・ヨーロッパ電信局 (Indo-European Telegraph Department) が管理した [Simpson 1928: 386]¹²。

二番目のルートは、地中海の海底電線からスエズ運河を経由してインド洋に入り、ボンベイに達することによって、イギリスとインドをイギリス独占の電信線 (いわゆる紅海線 Red Sea Route) によって直結した。このルートは1870年6月に開業した [同上]。紅海線の開通は国際メディアの注目を引き、各国の新聞によって報道された。例えば、1870年6月にイギリスの『デイリー・テレグラフ』紙は電信線の敷設を担当したイギリス・インド海底電信会社 (British Indian Submarine Telegraph Company、後のイスター電信会社) の社長ジョン・ペンダーが開いた祝賀会の様子を報道し、電信という技術の素晴らしさや多面的な応用性を強調した。『デイリー・テレグラフ』によれば、電信はインドで起きた反乱をイギリス本国政府に素早く警告・通知できるほか、海軍や艦隊を嵐から救い、イギリス国民の朝食のテーブルに世界各地からのニュースを送達し、距離や時間を廃絶した素晴らしい技術であった [Souvenir of the Inaugural Fete 1870: 46-50]。『デイリー・テレグラフ』のほか、イギリスの『タイムズ』や『オブザーバー』、アメリカの『ニューヨーク・ヘラルド』やインドの『マドラス・タイムズ』もこのイベントを報道した。『マドラス・タイムズ』はインド総督メイヨーがアメリカ大統領ユリシーズ・S・グラントと交わした電報通まで掲載し、多幸感に満ちた祝賀会の雰囲気を読者に伝えようとした [Madras Times 1870: 2 July]。

帆船や蒸気船による情報通信に比べると、電信による通信は以前では考えられないほど早かった。1866年にトルコ線を通じて配信されたメッセージは平均で6日8時間44分をかけてインドに届いた。ロシア線による平均通信時間は17日5時間5分であった。紅海線の敷設が完了したことで、通信に必要な時間はさらに短縮し、1871年の時点では6時間7分まで減少していた [Simpson 1928: 385-386]。電信線の構築と拡張によって、一種のグローバルな情報通信ネットワークが確立されていくが、

情報流通は即時に姿を変えたわけではない。当初、海底電線や陸上電線の断線・破壊などは重要な故障原因になり、電信の有効性を疑う人も少なくなかった¹³。特に、ボンベイとカルカッタの商人層は、電信線の故障や不正な取り扱いに伴うトラブルの事例を参考にしながら、電信会社やインド植民地政府に対する不満を、当時の新聞紙やボンベイ・ベンガル商工会議所の年次報告書などを通じて暴露した¹⁴。さらに、19世紀後半にかけて高額のままであり続けた電報料もイギリスとインドの間の通信量に影響を与えた。例えば、トルコ線が開通した1865年に、インド宛の電報は20語あたりに5ポンド1シリングであったのに対して、1871年にその料金はほぼ半分まで減少した。しかし、直通の紅海線やインド・ヨーロッパ線を利用する場合、同じ電報を配信するためには4ポンド10シリングという高い通信料が必要であった [Anderson 1872: 300, Simpson 1928: 392]。

このように、19世紀インドにおける英語新聞は電信と蒸気船という通信技術を共に利用し、ニュースの収集に挑んだのである。電信の開発と導入は情報通信という分野において様々な可能性を生み出したことは否定できないが、電信による通信には限界があったことも明らかである。それらの状況は植民地期インドにおけるニュース報道にどんな影響を与えたのか、以下の節で考えてみたい。

4 電信ニュースの世界—19世紀インドにおける英語新聞を事例に一

本節では、19世紀インドで発行されたいくつかの英語新聞におけるニュース報道を分析し、この時期に開発・導入された電信がインドにおけるジャーナリズムにとってどのような意味を持っていたのかを検討する。データ収集や分析方法を明確にした上で、ニュース変貌の過程を多角的観点から考察していきたい。

4-1 分析の枠組みと方法

欧米の新聞に焦点を当てた先行研究と対照的に、本稿は19世紀インドで発行された植民地新聞に注目し、最新ニュースを最も必要としていた大手の日刊紙を中心に分析を行っていく。本稿の目的はニュース報道の変貌を長期的かつ比較的視野から検討することであり、長期にわたっ

て発行を続けた『ボンベイ・ガゼット』(Bombay Gazette)と『イングリッシュマン』(Englishman)という2紙を中心に検討を行っていく。

具体的には、紙名の通りボンベイで発行されていた『ボンベイ・ガゼット』における記事を1830年から1900年にかけて10年ごとに検討の対象とし、主に7月の第1水曜日号と第3木曜日号に注目しながら、ニュース報道の特徴を内容と形式の両面にわたって考察した。一方、カルカッタで発行された『イングリッシュマン』の場合、同様の方法を用いて、掲載された記事を1840年から1900年にかけて検討した。その上で、19世紀にわたるニュース報道の変化をよりよく把握するため、政治、戦争、犯罪、暴動、飢饉など、様々な事件に関する報道の検討も加えた。この場合、『ボンベイ・ガゼット』と『イングリッシュマン』のほか、『マドラス・タイムズ』(Madras Times)、『タイムズ・オブ・インディア』(Times of India)、『ベンガリー』(The Bengalee)など、インドの主な都市で発行された大手の英語新聞における記事も分析の視野に入れた。

ここで断っておきたい点が、大きく二つある。一つは、今回の分析成果はインドにおける都市ジャーナリズムに限り、主に電信によって配信された国際ニュースの確保に必要な資金を有した大手の新聞に関連するということである。周知のように、政治や貿易の中心地であったカルカッタ、ボンベイ、マドラスはニュースの中心地でもあり、それら3都市で発行された新聞は最も栄えていた。特に国際ニュースやイギリス植民地行政に関連したニュースはその3都市からインド各地へと流通していくことが一般的であった。

もう一つは、今回の研究成果は19世紀インドにおける英語ジャーナリズムに限っているということである。現地語で発行された新聞や雑誌はすでに19世紀初頭に出現するが、日刊ジャーナリズムは長いあいだ英語新聞によって独占された。特に、ヒンディー語ジャーナリズムは20世紀に入ってから発展したことも踏まえて、今回の分析は英語新聞に限ることにした [Bhatnagar 2003]。

4-2 ニュースの形式

植民地期インドにおける英語ジャーナリズムは独自の特徴を持っていたが、イギリスやアメリカで定められた形式や内容に関する規範に影響されていたことも否定できない。この動向は、インドにおける英語新

聞の頁数の変化にも反映されていた。1880年代までの日刊英語新聞の多くの紙面は4頁、1頁あたりおよそ6～7段のものであったが、1880年代頃からアメリカやイギリスの読者の間で人気を集めてきたブロードシート版の影響を受け、その頁数は8頁に増えた¹⁵。確かに、この時期にはアメリカやイギリスの日刊地方紙の多くも4頁から8頁へと頁数を増やした [Barnhurst and Nerone 2001: 82]。このことから、インドの主要都市で刊行された日刊英語新聞はアメリカやイギリスにおける日刊地方新聞に相当したことが分かる。

他方、インドにおける英語新聞はインドという特殊な社会や政治制度に影響を受けたことも明らかである。イギリス植民地政府が現地での紙生産を興し始めた1870年代までには、新聞の印刷に必要な用紙は不足していたため、高額な費用をかけなければ用紙を取得できない状態であった [Stark 2007: 187-192]。帆船時代にはイギリスとインドの間の情報交換は長い時間をかけて行われていたため、情報は不足しており、紙面をニュースで埋められないことも珍しくなかった。しかし、通信手段の発達に伴った情報量の増加は新聞頁数の増加の必要性をもたらした。その結果、19世紀後半に『ボンベイ・ガゼット』と『イングリッシュマン』両紙は紙面の頁数を増やすほか、1頁あたりの段数も増やし、より多くの情報を掲載しようとした。

次に、英語新聞におけるニュースの位置を考えてみよう。現在では最新情報を新聞の1面に載せるのが普通であるが、19世紀インドの英語新聞は、イギリスやアメリカの多くの新聞と同様に、最新情報を新聞の中のページに載せた。それは、新聞の1面に、新聞事業を支えていた商業やイギリス植民地政府の広告を載せたからであった¹⁶。『イングリッシュマン』の経営者・編集者ストークエラ (J. H. Stocqueler) が記述したように、特に医薬品広告は新聞にとって重要な収入源であった [Stocqueler 1873: 97]。ただし、広告と売り上げからの収入に依存した英語新聞であったが、実際には、植民地政府の支援なしに存続することは困難であった。19世紀における新聞界の政府との関係は様々な形をとっていたが、政府が新聞を購読したり、政府広報の掲載を依頼したり、郵税の免除を認めることによって新聞の無料送達を支えたりしたことが一般であった¹⁷。例えば、1822年にボンベイ政府は、週刊グジャラート語紙『ボンベイ・サマーチャール』(Bombay Samachar) の経営者

Furdonjee Marzban の依頼に応じ、50 部の購読を認めたが、僅か 1 年後にその定期購読を中断させたという記録がある [IOR/F/4/816/21744, 1824, The Bombay Government subscribe to native newspapers in the Gujarati, Hindustani and Persian languages, February-July]。

最新ニュースは新聞の中のページに載せていたにもかかわらず、大手の英語新聞はニュースの速報性を重視したといえる。というのは、最新情報を手に入れるため、新聞の経営者・編集者は様々な工夫をこらしたからである。例えば、カルカッタの『イングリッシュマン』を編集したストーカーは 1835 年に起きたフランス王ルイ・フィリップ暗殺未遂事件を、友人がインドに運んできたヨーロッパ新聞に基づいて独占報道し、およそ 1,200 ポンドの収入を得た [Stocqueler 1873: 95]。さらに、1860 年代には、インド電信局が『ボンベイ・ガゼット』と『タイムズ・オブ・インディア』に配信した広報電報 (public news telegrams) が第三者に売り渡されるという事件が相次いだため、ボンベイ商工会議所が「大きな被害を受けた」と政府に訴えた記録も残っている [Bombay Chamber of Commerce Report for 1864-65: 49-50]¹⁸。

以上から、次の 2 点に分かる。一つは、英語新聞を経営したジャーナリストたちは、電信がインドへ導入される以前からニュースの速報性を十分に認識し、重視していたということ、もう一つは、植民地インドという社会的・政治的枠組みのなかで発展してきた英語新聞は、当時形成されつつあった英語ジャーナリズムのグローバルな共通基盤にも大きな影響を受けたということである。

4-3 ニュースの内容

本節では新聞ニュースと通信手段の関係について考察したい。

19 世紀における『ボンベイ・ガゼット』と『イングリッシュマン』による電信報道は以下の主なカテゴリーに区分できる (表 2)。

表 2 電信ニュースの内訳

経済情報	政治情報	災害情報	犯罪情報
汽船の入港 汽船の出港 両替相場 市場動向	インド植民地政府に関する情報 イギリス本国政府に関する情報 暴動 戦争 軍事演習	疫病 飢饉 地震 津波	強盗 殺人 火災

両紙によって報道されたニュースの内容は多様であったが、経済情報と政治情報に関する記事は特別な位置を占めたということが分かる。前述したように、経済情報は商人層にとって欠かせないものであり、カルカッタ、ボンベイ、マドラスなどで活躍したイギリス人とインド人商人は早期から電信ネットワークの建設と拡大に関心を示した。両紙に掲載された最初の電信ニュースは腕木によって配信された船舶の入出港、両替相場、市場動向などに関する情報であった。インド初の腕木電線はカルカッタ近郊に敷設されたため、最初のセマフォア電報 (Semaphoric Telegrams) はカルカッタの『イングリッシュマン』に掲載されたのである。例えば、1840年7月23日発行の『イングリッシュマン』には、後の「電気ニュース」(Electric News) を思い起こさせるセマフォア情報 (Semaphoric Intelligence) が掲載されていた (表3)。

表3 電信ニュース発達の経緯

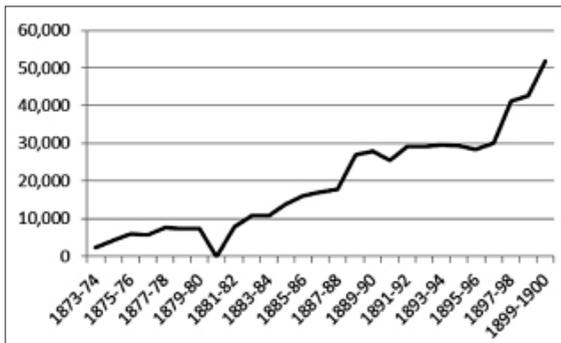
<i>Lloyd's List, 19 January 1753</i>
The <i>Thomas and Rebecca</i> , Ellery, from London for Dublin, is lost off Wexford.
<i>Englishman, 23 July 1840</i>
Semaphoric Intelligence, - July 22. AT KEDGEEREE. - <i>Charles Dumergue and Oriental</i> passed up at 10 A.M.
<i>Bombay Gazette, 20 July 1860</i>
LATEST INTELLIGENCE. (By <i>Electric Telegraph</i> .) MADRAS. WEDNESDAY, 18th July. The steamer <i>Jeddo</i> , from Bombay, was signalled at Galle on Wednesday last at 7 A.M.

電信ニュースの発達の経緯をよりよく知るために、『イングリッシュマン』に掲載されたセマフォア電報を、18世紀にロンドンで発行された *Lloyd's List* という商業新聞に掲載された船舶情報と、1860年に『ボンベイ・ガゼット』が報道した電気ニュースと比較してみよう (表3)。以上の電報を参照すれば分かるように、三つとも短い文が特徴で、難破した船舶や船舶の通過などに関する「事実」のみを簡明に報道するということが分かる。つまり、19世紀の電信ニュースは電信が発明される以前からの報道に依存するところが大きく、過去との革命的断絶を示すより、むしろ報道の継続性を示しているといえる。ハリス (M. Harris) が指摘するように、この報道様式は連載出版物の誕生を目撃した17世紀ロンドン

で流行し、経済情報を簡明に報道するために開発された [Harris 1999]。さらに、18世紀イギリスにおける新聞の多くは解説や意見より事実に基づいた報道をめざしていたことも考えると、18世紀ジャーナリズムと19世紀ジャーナリズムのあいだの類似点が明らかになってくる [Hampton 2004: 37-38]。

インド英語新聞における経済報道は19世紀にわたってほとんど変化しなかったのに対して、政治報道は通信料と共に変わっていくことが特徴である。英語新聞に掲載された外国電報はイギリス植民地政府・イギリス本国や他の欧米強国に関連したものが多く、ロイター通信社がほぼ独占的に提供した。具体的にいうと、電信ニュースは英国議会やビクトリア女王、政治家、世界各地で起きた戦争や暴動などに関するものがほとんどであった。さらに、1880年代までに英語新聞の「最新電報」欄 (Latest Telegrams) に掲載された政治電報は外国電報のみであったということも重要である。つまり、検討した新聞においては、「最新電報」という見出しのもとで掲載されたニュースは外国電報のみであり、内国ニュースは電報の形式さえとっていなかったのである。しかし、1880年代に入るとその状況が変わっていく。その背景には植民地当局が決めた内国新聞電報料の削減があった。表4を参照すれば分かるように、1880年代からインド電信局が扱った新聞電報の数が増えていく。確かに、『ボンベイ・ガゼット』、『イングリッシュマン』、『マドラス・タイムズ』などを検討すると、この時期を境に、インド各地から配信された内国電報は紙面を埋めるようになる。電報の内容は、特にイギリス人読者の多くが

表4 新聞電報数の変化、1873-1900



Administration Reports of the Indian Telegraph Department, 1873-1900 より著者作成

求めていた植民地体制に関する情報が多かった。そのなかでも目立っていたのは北西辺境における暴動や軍事練習などに関する電報であった。例えば、1880年7月7日発行の『ボンベイ・ガゼット』に掲載された15通の電報のうち、9通は北西辺境の暴動

を報じていた。

他方で、19世紀後半を通じて、外国電報の数と長さは高額な通信料によって制限されていた。経済や戦争情報を交わすには最適であった電信は、実際に報道の要点をまとめた「事実」の配信に利用されることが多く、新聞記事の詳細は依然として船舶によって文書という形で郵送され続けたのである。その結果、情報は発生順ではなく、インドに届き次第報道されたため、異なる技術手段によって送られた情報の内容に時差が生じ、読者を混乱させることもしばしばあった。例えば、1866年7月10日に陸路郵便で送られた普墺戦争に関する報道が戦争の始まりを発表したのに対して、同じ日に掲載されたロイター電が戦争の終結を宣言したという出来事があった [Times of India 1866: 25 June, 9 July, 10 July]。

さらに、電信は文字や数字を電気信号に変換して遠方に送る技術であるため、特に数字と見慣れない固有名詞を読み解く際に間違いが起りやすかった。『タイムズ・オブ・インディア』、『ボンベイ・ガゼット』、『イングリッシュマン』、『マドラス・タイムズ』などによる普墺戦争の報道を検討すれば分かるように、地名や人名の間違いは、しばしば見かけられる。例えば、イタリアのポー川は『トー川』として報道され、Rovigoという村落は「Rovindo」、「Rovoredo」、「Ruindo」などと不正確に報道された。そのほか、1866年7月3日に起きたケーニヒグレッツの戦いの行方はロイター電をもとにして「Great Defeat of the Prussians」と「Great Defeat of the Austrians」として報道され、読者を混乱させた例もある [Times of India 1866: 9 July, 10 July, 24 July]。このような解読ミスに苦しんだのは特に商人たちであり、両替相場や市場動向に関する情報をめぐるトラブルが相次いだことが分かる。

最後に、電信網の拡張自体にも限界があったと言える。主にボンベイ、カルカッタ、マドラスなどのような港湾都市で発行された新聞と、地方で発行された新聞の間では報道の格差が際立っていた。ボンベイはインド亜大陸の海上交通の拠点だけでなく、情報の拠点でもあった。特に1866年にボンベイがカルカッタに代わって郵便の入港都市となって以来、ボンベイで発行された新聞は他の大都市の新聞よりも約1-2日早く最新情報を載せるようになった。さらに、ロイター通信社が配信した電報を受信した新聞と受信しなかった新聞の間にも格差がみられた。1879年にインドの大手英語新聞がロイター通信社と交わした契約書に

よれば、この新聞社は毎年4,800ルピーの通信料金をロイターに支払わなければならなかった。戦争のあいだ、金額はさらに増加し、6,000ルピーに達した [RA/LN435, 1879, Agreements between Reuters and the Englishman, Bombay Gazette, Civil and Military Gazette, Pioneer and Madras Times]¹⁹。19世紀インドで刊行されていたインド語新聞のほか、英語の週刊紙・隔週刊紙や小規模の日刊紙にとっても、それは手の出せない金額であった。1900年1月に、シュレンドロナト・バナジー (Surendranath Banerjea) が経営していた日刊紙『ベンガリー』が初めてロイター通信社と契約を結び、ロイター電を受信し始めた²⁰。インド人が経営していた新聞で、ロイター通信社と契約を結んだ新聞は、これが最初であった。しかし、実際には『ベンガリー』紙も大都市の大手新聞で、英語で刊行されていた。ロイター電を受け取れなかった現地語や英語の新聞は大手の日刊紙から転載記事を載せることが多かった。

5 結論

以上から、19世紀インドにおける英語新聞が交通手段と情報通信手段と共に変化していったことが分かる。しかし、その変化の内容には地域的・経済的格差があり、「通信革命」は新聞ごとに異なっていたといえる。電信の利用によって、インド内ばかりではなく、イギリスとインドの間のコミュニケーションは著しく向上し、特に商人や行政官にとって不可欠であった船舶・経済・政治などに関する様々な情報は迅速に報道されるようになった。それまでは東インド会社が運営した喜望峰回りの帆船で4ヶ月もかけてロンドンとカルカッタの間で郵便物が運搬されていたのに対して、電信の利用によって僅か数日間、数時間、後には数分間でインド側との情報のやり取りが可能になった。

電信の発明と普及によって、以前から使われていた情報交換手段が利用されなくなったわけではない。むしろ、それぞれの技術はそれぞれのニッチを持っていて、そのニッチにおいて活用された。電信は「事実」のみを伝えた短い文を配信するために使用されたのに対して、船舶によって送達された情報は電報の内容を確認・否定し、ニュースの詳細を事細かに記録した。そして、その「事実」の内容は電信の技術的特質だけでなく、インド植民地政府の政策や英語新聞の読者のニーズによって

も形成されていた。このことは英語新聞が掲載したニュースの内容に反映されている。

本稿では、イギリスとインドの間の通信ルートを記述した上で、19世紀インドで発行された英語新聞におけるニュースの発展をたどり、電信をインド新聞紙に位置づけようとした。電信による報道の変化は革命的というより、むしろ漸進的なもので、その意味では、19世紀はインドにおける英語ジャーナリズムにとって過渡期であったといえる。情報を送達することによって新しい可能性を拓いた電信は、一方では、長い歴史を持つ報道のあり方のなかにも位置づけることができるのである。

謝辞・原稿のネイティブ・チェックをして下さった寺田晋さんに感謝いたします。

註

- 1 インド電信史については、二つの包括的な記述がある [Shridharani 1953, Lahiri-Choudhury 2010]。インド電信史の様々な側面を研究した文献として、以下のものも挙げられる。[Gorman 1971, Ghose 1995, Lahiri-Choudhury 2000, Wenzlhuemer 2012] など。インド・ジャーナリズム史を中心とした研究も電信について言及しているが、多くの場合、20世紀に焦点をおいている。主に以下の文献を参照。[Raghavan 1987, Kaul 2003, Codell 2004] など。
- 2 モントゴメリーの言葉はデリー電信記念碑 (Delhi Telegraph Memorial) に刻まれている。この記念碑は1902年4月19日にカーゾン卿の面前で除幕式が行われ、著者が調査を行った2010年にまだ残っていたが、碑文が判読し辛くなっていた。
- 3 二重電信 (duplex telegraphy) とは送信と受信を同時に行うことができる電信のことである。
- 4 この点に関しては、[土屋 1998]、特に2-3頁も参照されたい。
- 5 ただし P&O 社は定期航路のみを独占し、イギリス・インド間における人・物・情報の運搬はほかの汽船会社によっても行われた。例えば、ボンベイ・スエズ線においてはボンベイ・ベンガル汽船会社も活躍し P&O 社による定期郵便の到着に先立って、ボンベイに手紙や新聞を送達した。普墺戦争のあいだも、『タイムズ・オブ・インディア』(Times of India) は P&O 社の定期郵便のほか、ボンベイ・ベンガル汽船会社によって配信された情報も報道した。こうして届いたニュースはボンベイ以外の新聞にも掲載された。
- 6 近代日本における通信技術史に関しては、[石井 1994] が代表的な文献である。
- 7 腕木通信機とは視覚通信機の一つであり、18世紀末にフランスのシャップ兄弟によって開発された。電気電信とは異なり、人力のみで信号を送信するという通信方法である。具体的には、符号化された文字と数字を、1本の長い棒とそれに組み合わせた2本の短い棒の形状を変化させることによって、隣の腕木通信塔へと伝え、通信塔に配置された要員は棒の動きを望遠鏡で確かめながら、情報を解読する。腕木通信は18世紀末から19世紀前半にかけて、

ヨーロッパ、特にナポレオン時代のフランスで活用された。ただし、フランスの腕木通信は国家が独占していたため、送信された情報内容は軍事情報と宝くじの当たり番号に限られていた。日本では利用された記録が残っていないが、インドの場合、すでに18世紀後半には腕木通信を導入する試みがみられる。例えば、1767年にトマス・バーナードという人物がハイダル・アリーによるカーナティックの侵略を防ぐために視覚電信の入植を提唱した。19世紀前半にカルカッタは現在のウッタール・プラデーシュ州にあるチュナル町と腕木通信塔で結び付けられ、軍事情報の交換に用いられた。さらに、1830年5月にフーグリー河口に位置するKedgerie村(現在Khijri)はカルカッタと13本の腕木通信塔で結びつけられた。この腕木通信は船舶情報の交換に欠かせない技術であった [Beauchamp 2001, Muley 2005: 165-172]。

- 8 外交と電信の歴史については、[Nickles 2003]を参照。
- 9 インドにおける電信線は全てが国有というわけではなかった。例えば、1864年の時点では、3,000マイルの電信線が私営であり、様々な鉄道会社によって建設・管理されていたという。
- 10 電信をめぐる議論に関して、ボンベイやベンガル商工会議所の年次報告書が参照できる。[*Reports of the Bombay Chamber of Commerce, 1864-1895, Half-Yearly Reports of the Committee of the Bengal Chamber of Commerce, 1854-1869*]。
- 11 その一方で、インドで実験を続けていたオシヨーネシーも海底電信に興味を示しており、ガッパバーチャが海底ケーブルを絶縁するための最適な素材であると気づいていたことを示す記録も残っている。[Adams 1889: 15]によれば、1839年にオシヨーネシーはカルカッタのフーグリー川を横断したケーブルを敷設し、実用に耐える海底ケーブルに始めて成功したという。
- 12 インド・ヨーロッパ電信局(Indo-European Telegraph Department)とインド・ヨーロッパ電信会社(Indo-European Telegraph Company)との区別に注意しておきたい。前者はインド植民地政府の一部であったのに対して、後者はジューメンズ家が運営した民間会社だった。ロイター通信社の創始者、ユリウス・ロイターもその出金者の1人だった。
- 13 新技術の受容をめぐる多様な反応に関しては、[Prasad 2013]を参照。
- 14 例としては、下記の資料がある。[*Half-Yearly Report of the Committee of the Bengal Chamber of Commerce, Calcutta, November 1, 1854: xxi-xxiii, Bombay Chamber of Commerce Report, 1864-65: 49-50*]。
- 15 ここでは特に『ボンベイ・ガゼット』と『イングリッシュマン』を参照。
- 16 ただし、ナワル・キシヨールが経営・編集したアワド・アクバル (Avadh Akhbar)は例外的で、最新ニュースを紙面に載せた [Stark 2008: 365]。
- 17 アラーハーバードの『パイオニア』紙(*The Pioneer*)は長い間、政府の代弁者であると思われていた。
- 18 インド電信局が配信した広報電報は経済情報も含んでいた。
- 19 この時期の『タイムズ・オブ・インディア』との契約は残されていないが、この新聞もロイターの加入者であった [RA/LN247, 1890-1891, Agreements for supply of news between Reuters and the Times of India, Civil and Military Gazette, Madras Mail, Rangoon Gazette, Pioneer, Bombay Gazette, Madras Times, Morning Post and Englishman]。
- 20 パナジーによると、『ベンガリー』がロイター通信社のニュースを受信し始めたことは「インドにおけるネイティブ・ジャーナリズムにとって、新たな出発であった」。この広告は1900年

1月に数回にわたって当新聞に掲載された。例えば、[*Bengalee*: 6 January 1900]を参照。

参考文献

IOR: India Office Records, British Library, London

RA: Reuters Archives, London

- 石井寛治、1994、『情報・通信の社会史—近代日本の情報化と市場化—』、有斐閣。
- 後藤伸、1984、「インドへの汽船交通の確立—イギリス海運企業P.&O.の成立によせて—」、『香川大学経済論議』、57-3、151-173頁。
- 土屋大洋、1998、「大英帝国と電信ネットワーク—19世紀の情報革命—」、『Glocom Review』、3-3、1-17頁。
- Adams, M., comp., 1889, *Memoir of Surgeon-Major Sir W. O'Shaughnessy Brooke, In Connection with the Early History of the Telegraph in India*, Simla, The Government Central Printing Office.
- Administration Reports of the Indian Telegraph Department, 1855-1910* [IOR/V/24/4282-4288].
- Anderson, James, 1872, "Statistics of Telegraphy", *Journal of the Statistical Society of London*, 35, pp. 272-326.
- Banerjea, Surendranath, 1925, *A Nation in the Making: Being the Reminiscences of Fifty Years of Public Life*, Reprint, Bombay: Oxford University Press, 1963.
- Barnhurst, Kevin G., and John Nerone, 2001, *The Form of News: A History*, New York: The Guilford Press.
- Barns, Margarita, 1940, *The Indian Press*, London: George Allen & Unwin Ltd.
- Beauchamp, K. G., 2001, *History of Telegraphy: Its Technology and Application*, London: The Institution of Engineering and Technology.
- Bell, Allan, 2007, "Text, Time and Technology in News English", in S. Goodman, D. Graddol and T. Lillis (eds.), *Redesigning English*, New York: Routledge, pp. 79-112.
- Bhatnagar, R., 2003, *The Rise and Growth of Hindi Journalism*, Varanasi: Vishwavidyalaya Prakashan.
- Blondheim, Menahem, 1994, *News over the Wires: The Telegraph and the Flow of Public Information in America, 1844-1897*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Blondheim, Menahem, 2003, "Slender Bridges of Misunderstanding: The Social Legacy of Transatlantic Cable Communication", in N. Finzsch and U. Lehmkuhl (eds.), *Atlantic Communications: The Media in American and German History from the Seventeenth to the Twentieth Century*, Oxford: Berg, pp. 153-170.
- Carey, James W., 2009, *Communication as Culture: Essays on Media and Society*, Rev. (ed.), New York: Routledge.
- Codell, Julie F., 2004, "Introduction: The Nineteenth-Century News from India", *Victorian Periodicals Review*, vol. 37 (Summer), pp. 106-123.
- Cotton, J. S., and W. S. Meyer, 1908, *The Imperial Gazetteer of India*, Vol. 3: Economic, Oxford: Clarendon Press.

- Dempsey, J. M., and W. Hughes (eds.), 1871, *Our Ocean Highways : A Condensed Universal Hand Gazetteer and International Route Book by Ocean, Road, or Rail*, London : Edward Stanford.
- The Gazetteer of Bombay City and Island*, 1909, Vol. 1, Bombay: The Times Press.
- Ghose, Saroj, 1995, "Commercial Needs and Military Necessities: The Telegraph in India", in Roy MacLeod and Deepak Kumar (eds.), *Technology and the Raj: Western Technology and Technical Transfers to India, 1700-1947*, New Delhi: Sage, pp. 153-176.
- Gorman, Mel, 1971, "Sir William O'Shaughnessy, Lord Dalhousie and the Establishment of the Telegraph System in India", *Technology and Culture*, 12, pp. 581-601.
- Half-Yearly Reports of the Committee of the Bengal Chamber of Commerce, 1854-1869*, Calcutta [IOR and Nehru Memorial Museum and Library, New Delhi]
- Hampton, Mark, 2004, *Visions of the Press in Britain, 1850-1950*, Chicago: University of Illinois Press.
- Harcourt, Freda, 2006, *Flagships of Imperialism: The P&O Company and the Politics of Empire from Its Origins to 1867*, Manchester: Manchester University Press.
- Harris, Michael, 1999, "Shipwrecks in Print; Representations of Maritime Disaster in the Late Seventeenth Century", in R. Myers and M. Harris (eds.), *Journeys through the Market: Travel, Travellers and the Book Trade*, New Castle, DE: Oak Knoll Press, pp. 39-64.
- Headrick, Daniel R., 2006, "British Imperial Postal Networks", International Economic Congress, Helsinki, August 2006, pp. 1-17.
- Headrick, Daniel R., 1981, *The Tools of Empire: Technology and European Imperialism in the Nineteenth Century*, Oxford: Oxford University Press.
- Kaul, Chandrika, 2003, *Reporting the Raj: The British Press and India, c. 1880-1922*, Manchester: Manchester University Press.
- Kielbowicz, Richard B., 1987, "News Gathering by Mail in the Age of the Telegraph: Adapting to a New Technology", *Technology and Culture*, vol. 28, pp. 26-41.
- Lahiri-Choudhury, D. K., 2000, "'Beyond the Reach of Monkeys and Men?' O'Shaughnessy and the Telegraph in India c. 1836-56", *Indian Economic Social History Review*, vol. 37, pp. 331-359.
- Lahiri-Choudhury, D. K., 2010, *Telegraphic Imperialism: Crisis and Panic in the Indian Empire, c. 1830*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Lloyd's List, 1753 & 1755*, 1969, Westmead, UK: Gregg International Publishers Limited.
- Muley, G., "The Introduction of Semaphore Telegraphy in Colonial India", 2005, in A. K. Bagchi et al., (eds.), *Webs of History: Information, Communication and Technology from Early to Post-Colonial India*, New Delhi: Institute of Development Studies Kolkata and Manohar, pp. 165-172.
- Nickles, D. P., 2003, *Under the Wire: How the Telegraph Changed Diplomacy*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Parliamentary Papers, 1866, *East India Communications*, vol. IX, London.
- Prasad, Ritika, 2013, "'Time-Sense': Railways and Temporality in Colonial India", *Modern Asian Studies*, vol. 47, pp. 1252-1282.
- Raghavan, G. N. S., 1987, *PTI Story: Origin and Growth of the Indian Press and News Agency*, Bombay: Press Trust of India.
- Rantanen, Terhi, 2009, *When News Was New*, Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.

- Reports of the Bombay Chamber of Commerce, 1864-1895*, Bombay [IOR and Nehru Memorial Museum and Library, New Delhi].
- Schudson, Michael, 1978, *Discovering the News: A Social History of American Newspapers*, New York: Basic Books.
- Shridharani, K., 1953, *Story of the Indian Telegraphs: A Century in Progress*, New Delhi: Government of India Press.
- Sidebottom, John K., 1948, *The Overland Mail: A Postal Historical Study of the Mail Route to India*, Perth, Scotland: George Allen and Unwin Ltd.
- Simpson, Maurice G., 1928, "The Indo-European Telegraph Department", *Journal of the Royal Society of Arts* vol. 76, pp. 382-394.
- Souvenir of the Inaugural Fete [Held at the House of Mr. John Pender] in Commemoration of the Opening of Direct Submarine Telegraph with India, June 23rd 1870, 1870*, London, s.n.
- Stark, Ulrike, 2007, *An Empire of Books: The Naval Kishore Press and the Diffusion of the Printed Word*, New Delhi: Permanent Black.
- Stocqueler, J. H., 1873, *The Memoirs of a Journalist*, Bombay: Times of India.
- Tully, John, 2009, "A Victorian Ecological Disaster: Imperialism, the Telegraph, and Gutta-Percha", *Journal of World History* vol. 20, pp. 559-579.
- Tyler, H. W., 1867, "Routes of Communication with India", *Journal of the Royal United Service Institution* vol. 10, pp. 276-288.
- Wenzlhuemer, R., 2012, *Connecting the Nineteenth-Century World: The Telegraph and Globalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Winseck, Dwayne R., and Robert M. Pike, 2007, *Communication and Empire: Media, Markets, and Globalization, 1860-1930*, Durham; London: Duke University Press.

要旨

植民地期インドにおける新聞に関する研究は数多いが、新聞と通信技術のかかわりに焦点をあてた研究は僅かしかない。しかし、19世紀に実用化した蒸気船や電信は新聞の発達過程において大きな意味をもっていた。特に電信は、時間・距離・空間を越える技術として注目を浴びた。電信ネットワークの構築と拡張によって、インド亜大陸内だけでなく、イギリスとインド、ヨーロッパとアジアの間の情報交換はスピード化され、インドにおけるニュース報道にも変化がみられるようになった。本稿は、電信ルートの開設と普及を明らかにした上で、19世紀インドで刊行された英語新聞をいくつか取り上げ、インド新聞史における技術の意味と役割について検討する。

Summary

Technologies of Communication and Newspapers in Nineteenth-century India:

The Case of the Telegraph

Bonea Amelia

This paper examines the role of technologies of communication in the development of the newspaper press in nineteenth-century India, focusing particularly on electric telegraphy and its application to news reporting. The electric telegraph was introduced to India during the mid-nineteenth century and became celebrated as a device which could conquer both time and space by making possible the transmission of intelligence at speeds previously unheard of, both in India and between Britain and India. The global expansion of the telegraph network during the second half of the nineteenth century added a new dimension to the exchange of information between Asia and Europe; the newspaper press, along with the colonial administration and the mercantile community of India, was among the earliest and most enthusiastic users of telegraphy. This paper traces the construction and development of the telegraph network during the second half of the nineteenth century and uses examples from a selection of English-language newspapers to discuss the role of technologies of communication in shaping news reporting in colonial India. It argues that the nineteenth century was a period of transition in the history of English-language news reporting, in the sense that changes were gradual rather than revolutionary and depended on a host of technological, social and political factors.